

# 失踪者

大村伸一

彼がいなくなって長い時間が過ぎた。今では彼のことを憶えている者も少なくなってしまった。彼のことを憶えている者などもう誰もいないのかも知れない。彼がいたころには、彼のことは誰もが知っていたし、彼について知りたいと思わない者はいなかったはずだ。それでも、いなくなってしまうえば次第に忘れられてしまう。

彼の性格を考えれば自分の意思で失踪したのだとは思えなかったが、他の誰かに消されたというのも考えにくい。彼に興味を持つ者はみな彼に好意を抱いていたはずだし、彼を消し去ろうなどと思うはずはなかった。彼の姿を見かけなくなり、もしかして彼が失踪したのではないかと噂された頃、誰もが彼を好きでいたことが分かった。表向きそう振舞っているだけでなく、心からそう思っていることは、彼がいなくなったからこそ、はっきりと分かったのかもしれない。

失踪という状態の始まった時間を定義することは難しい。彼を最後に見た時間なのか、もしも誰かに拉致されたのであれば、その拉致された時間と考えるべきか。最後に見た時間というものは、勿論、彼がまだ失踪する前の時間であり、失踪の始まった時間とは言い難い。拉致されのだとしたら、拉致した者たちはその時間を知っているだろうが、それをわざわざ教えてくれるはずはない。自分の意思でそれまでの生活を捨てたのだとすれば、彼がそれを決意した時間なのか、それとも決意だけでなく、実際に日常の行動と違った行動を取った時間になるのだろうか。日常の行動というものはいわば理想化された、現実には存在しない概念であり、だからその日常の行動には常に例外があるのだから、日常の行動と違った行動を取った時間とは、すべての時間ということになり、失踪の始まった時間を区別することなどはしない。だから、彼がいつ行方不明になったのかを正確に知ることは不可能だ。それならば、彼が本当に失踪しているのかどうかを判断することも難しい。つまり、彼の失踪がまだ始まっていないという可能性さえ常に残されているからだ。もしそうなら、彼はまた戻ってくるだろう。

失踪する前の彼について今ではほとんどが忘れられている。本当は忘れられてはおらず、毎日何処かで誰かが彼のことを思い続けているのかもしれないが、彼について言葉にする者が誰もいなくなってしまったので、忘れられたのかそうでないのかをはっきりさせることはで

きない。当時の彼は、誰からも愛され、彼の側に近づくために命を投げ出そうという者までいたのだから、彼が忘れられてしまったということは考えにくいかもしれない。彼の家の前には毎朝、通りを埋め尽くすほどの人が集まり、彼が家を出る様子を一目みようと待ち構えていた。その最前列に並ぶためには大量の資金と運と人脈が必要だったが、そのどれも持ち合わせていない者の中には、自分の身体に火をつけだれにも触れられないようにして彼の家の扉の前にまでたどり着いた者もいた。命をなくしはしたが、彼の母親以外で彼にそれほど近づいた者はそれまで一人もいなかったのだから、幸福だったのだろうと思う。

彼があれほどまでに人々に愛されたのは、彼の語る物語によるところが大きかった。彼は他の誰も真似のできないほどたくさんの、奇妙で面白く魅力的な物語を話してくれた。勿論、彼の語る物語に同じ話など一つもなく、一度聞き逃せばそれは二度と存在しないのだということ、誰もが知っていた。だからこそ、彼はあれほど皆に望まれていたのだし、その話を近くで聞きたいと誰もが争っていたのだ。

勿論、彼があれほどの物語を無尽蔵に語り続けているということには裏があるのだろうと怪しみ、不正を探ろうとする者もいないではなかった。彼がいなくなっただけのことだが、何人かが「彼の不正」と呼ぶ根も葉もない憶測を事実であるかのように暴きたてた。例えば、彼は密かに古代の墓標を見つけ出し、死者に捧げられた物語を奪い自分のものにしていただけとか、例えば、彼は何十人もの物語りを奴隷とし、彼らが苦役と引き換えに生み出す物語をああして語っていたのだとか、中には、彼は本当は何ひとつ語っておらず、巧妙なトリックによってその場にいる者全員に物語の幻聴を聞かせ、さらには心を操って麻薬のように彼の幻覚なしでは生きられなくしていたのだという辻褃の合わない作り話まであった。

勿論、彼は比類ない物語の才能に恵まれ、その才能によって人々を魅了していたのだ。あまり知られていないことだが、彼は難破した船に乗っていた妊婦から生まれ、波に運ばれて深い森の中で育つたために文盲であり、書かれたものから物語を得ることができなかった。子供の頃の物語に対する飢餓がどれほどであったかを思うと、私は今でも涙を禁じ得ない。しかし、彼はそのような同情とは無関係に、その飢餓の中で偉大な才能を育て開花させた。彼の物語があれ程までに人々を引きつけてやまなかったのは、彼のその絶望的なまでの飢餓の故なのである。

文字が読めなかった彼には、町にあふれる文字は意味をなさなかった。彼はその飢えを満たすために町を必要としなかった。彼が失踪するまでずっと森の中から便利なはずの町へと住処を移さなかったのは、そのせいなのだろう。住処といっても、町で普通に見かける住居ではなく、流木や嵐で風ぎたおされた木材を組み合わせ、森の生み出す静寂の中に時を閉じ込め

ることしかできないような構造物だった。その住居は彼がいなくなってすぐに、海の波にさらわれて消えてしまった。彼の後を追って行ったのだと言うものもいたが、大きな波をかぶり、ばらばらにされると元の森に姿を変えるところを私は見ていた。

文字を読むと言うことは、そこに書かれた意味を引き受けると言うことだ。彼以外のすべての人々は、文字を読みその意味を理解すると読まれた文字が消えてゆくとき、自分が確かにその言葉を理解し消えて行った文字のために、生涯その意味を失わないことを覚悟する。世界に二つと存在しえないその意味は、文字の消えた後自分の中にしか存在しないということ、改めて噛みしめる。この読むという行為の重みは私達の精神を鍛え確固たる記憶を根付かせる。文字に束縛されることのない彼の精神にはこの覚悟やそれから生まれる完全な記憶は欠けていただろう。しかし、そのかわり彼の得た無限ともいえる多様な物語を人々は愛したのだ。彼の生み出す物語は人々の欲望を刺激し続け、それを自分のものにしたいという激しい渴望で人々を苦しめた。愛とは苦しみだと彼は言わなかつただろうか。同じひとつの意味を他人と共有するなどという不潔でおぞましい考えに、人は耐えられるものだろうか。

多くの人々と同じように、私もまた彼の物語を愛し彼の物語を自分だけの物にしたいと願った。そのために彼の全てを知るために、私は彼に近づいた。森の家に共に住む許可を得て、その代わりに私は彼に仕えた。彼の望むものを提供し彼の快樂を満たした。彼の望むように、彼がより多くの人々の前で新しい物語を語る場所を準備した。それがどれほどの苦しみであったか、容易に想像できるだろう。それでも私は、彼に仕え彼の生活を熟知し彼の全てを知り尽くした。

彼がいなくなって長い時間が過ぎた。今では彼のことを憶えている者も少なくなってしまった。いや、彼のことを憶えている者などもう誰もいない。これを書いている私の他に、彼のことを憶えている者はいない。その意味を引き受けるとき文字が消えてゆくように、私が彼の存在の意味をすべて引き受けたとき、彼は消えてしまった。私は彼の消えてゆく瞬間を覚えている。彼がそれまでに語った物語がすべてが一つにつながっていたことや、彼が一度も語らなかった言葉をなぞるとき、そこにもう一つの物語が隠されていたことを、私はすべて覚えている。彼がいなくなって長いあいだ、私は彼のすべてを記憶し忘れることがなかった。

だがもう後少して、私は彼を忘れるだろう。私の身体は腐敗し、もう記憶を保つことができない。だから、私は彼を文字として残した。これを読む人の記憶の中に彼が再生し新たな輪廻を生きるように。